

「我らと警護の舟数隻は、三浦半島の西に回り込み鎌倉をめざす。満潮ゆえ和賀江島に上陸も易い。材木座から鎌倉へと攻め入り、すべて焼き討ちに致す」

実堯の号令は、舟から舟へと口伝えて伝播し、兵たちは一々応と答えた。

城ヶ島がみるみると迫ってくる。

その東脇をすり抜けるように三崎湊へ攻め掛かる里見水軍は、降り注ぐ矢を凌ぎながら、火矢をつがえて放った。

身を隠す義豊の脇を、幾つもの矢が飛び交う。

「殿、ご無事かあ」

隣舟から悲鳴にも似た福原丹後守の呼び声が風に乗ってくる。が、顔を上げる暇もない。

「ご無事なりい」

傳役の中里源太左衛門が上げる金切り声も、悲鳴に等しい。

三崎沖をすり抜けるように、やがて、実堯等の船団は城ヶ島西岸から油壺湾の外を指して帆走していく。

満潮に乗り、船団は相模湾を疾走した。断崖の多い半島西側は起伏が多く、湾が幾つも入り組み離岸流も複雑である。それを巧みに操りながら、やがて左手に小さく島影が視認できた。

あれは、江之島である。

弁財天の功德と靈験あらたかな評判を耳聴い義豊が識らぬ筈がない。

「叔父上、島には上陸せぬのか」

「あれは、敵地です」

「ここまできたのに、勿体ない」

「されば殿が北条を滅ぼしませ。然るのちに、

存分の御参詣を」

実堯は苦笑した。

「和賀江島の姿が見えてきました」

舳先の水兵の声が響いた。里見実堯は兜を着装するよう兵に下知した。水兵を除く兵がこれに従った。

義豊の兜は、傍らの中里源太左衛門・本間八右衛門のふたりが着けた。慣れぬ舟上の着装は手間取った。

「材木座に下りたら、まずは馬借を襲って馬を確保せよ。玉縄から兵が繰り出す前に、鎌倉を焼き払ってしまえ」

実堯の号令に、兵たちは怒号で応えた。

「叔父上、寺社も焼いてしまうのか」

「如何にも」

「玉隠和尚のよすが、俣び難し」

義豊は誼ある亡き玉隠英瑛の栄華を傷つけることに、難色を示した。

しかし、実堯は大声で明言した。

「足利も上杉もない鎌倉は、もはや北条支配の城塞にて。かの寺社は、もはや旧き張り子のよななもの。これを焼くことは、いわば城攻めの如し」

間近に見える寺社の土塀から、海めがけて僧兵が矢を放つのが見えた。傍らには武者もいる。旗差しは三ツ鱗、北条の紋だ。

個々の寺社が城塞の如しという実堯の指摘は正しい。

これほど無数の寺社を相手にしては、徒に刻ばかりを浪費する。焼き討ちという戦術は、誰もが妥当と思いつくことだ。

「優れた武将とは、修羅を生き地獄を征くもの、それがなくば、その先の極楽へはとも辿り着けませぬ」

実堯の言葉に、義豊は大きく頷いた。

舟は緩やかに和賀江島に接舷する。撤退の合図を示す兵を残して、舟はその沖合に待機した。

里見の軍勢は腰まで波に浸かりながら海岸へと上陸した。

「鎌倉に里見勢が上陸」

その報せに、玉縄城の北条氏時は愕然となった。

かくなるうえは迎え撃つべきのだが、いまは扇谷上杉勢がどっと押し寄せて、籠城の最中である。玉縄から軍勢を繰り出すことが至難であった。

鎌倉常駐の兵は僅かである。抵抗することも儘ならない。単独で扇谷上杉勢が動いたことに

疑問を覚えたが、成る程、これは陽動でもあつたのかと、氏は歯嚙みした。

何とかして上杉勢に気取られぬよう援軍を出せないものか、氏は思案した。

そして、陽動の動きを示す傍ら、柏尾川の濠から少数ずつ送り出すしかない、氏は思い定めた。

十
十
十

鎌倉炎上(3)

夢酔 藤山